

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 8 日現在

機関番号：15301

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2012～2014

課題番号：24652047

研究課題名(和文)芥川龍之介作品を中心とした近代日本における文学と精神科学の横断的研究

研究課題名(英文)Cross-sectional study of literature and mental science in modern Japan mainly on the Ryunosuke Akutagawa work

研究代表者

西山 康一(Nishiyama, Koichi)

岡山大学・社会文化科学研究科・准教授

研究者番号：40448212

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,500,000円

研究成果の概要(和文)：研究初年度は「奇怪な再開」・「南京の基督」など芥川龍之介中期の作品を、2年度目は「地獄変」・「二つの手紙」など芥川前期の作品を、最終年度は「歯車」・「河童」など芥川後期の作品を、それぞれ同時代の精神科学の動きとともに比較検討した。その結果、正常と異常の境界線を前提に狂気を興味本位的に取り扱っていた前期作品から、だんだんと正常と異常の境界線を曖昧化して、狂気というものを存在論・認識論上の根源的な問題として捉える後期作品への芥川作品の変化を浮き彫りにすると同時に、そうした作品間に見られる変化に、同時代の精神科学の影響があったことを明らかにする。

研究成果の概要(英文)：In the first year of research, a comparative study was carried out in connection to movements in contemporary mental science with regard to the mid-period works of Ryunosuke Akutagawa, and, in the second year of research, with regard to his early works, the final year of research, with regard to his later works. As a result, this study defined the changes in Akutagawa's works that occurred from the early period in which, out of curiosity, he dealt with "madness" based on the border between "normal" and "abnormal," through to his later works in which madness is taken as the fundamental issue from an ontological and epistemological perspective, and as the border between normal and abnormal gradually became more vague. At the same time, it clarified that the contemporary mental science had influence on such changes seen between these works.

研究分野：日本近代文学

キーワード：芥川龍之介 精神科学 狂気 文学と科学

1. 研究開始当初の背景

文学研究の中でも近年では、カルチュラルスタディーズの重要性が確認されてきた。芥川龍之介研究でも、たとえば雑誌『国文学解釈と鑑賞』別冊(2004年1月、至文堂)では「芥川龍之介 その知的空間」という特集が生まれ、芥川作品が当時の「知的空間」=文化的状況の中でどのように位置づけられるか検討されている。しかし、そうした研究状況の中でも、同時代の科学と芥川文学の関係性を検討するという研究は、あまり見られない。科学と文学の横断的研究を行う上でその有効な接点が、未だ確立されていないためである。その意味で、特に精神科学という存在は、その接点として有効であるように思われた。これまでも当時の精神科学(特に『変態心理』といった雑誌など)と芥川作品との関わりが検討されることがなくはなかったが、それ以外の精神科学の諸雑誌も含め、当時の精神科学に関わる言説全体を参照しながら本格的に研究されることはなかったといえよう。

しかし、芥川龍之介の作品を研究してきた結果、私は芥川作品には当時の精神科学の動向が深く関係していると考えようになった。そうした意識から、「狂気とスキャンダリズム 芥川龍之介『二つの手紙』における手紙公開形式の意味」(単著、『芥川龍之介研究年誌』第1号、2007年3月)という拙稿では、芥川龍之介の「二つの手紙」という作品と同時代の心理学・犯罪学との接触について論じた。だが、芥川作品、あるいは近代日本の文学全体における精神科学との関わりという研究課題からすれば、まだまだ不十分と言える。以上の学術的背景・動機から、本研究の重要性を認識し、本格的に取り組みたいと考えるように至った。

2. 研究の目的

本研究では、近代日本における文学と精神科学との関わりについて、特に芥川龍之介の作品を中心に検討することを目的とする。芥川には「二つの手紙」などの初期作品から、晩年の「歯車」などに至るまで、狂気について扱った作品が多い。初期から晩年に至るそれらの作品間に見られる、精神の正常と異常の境界線に対する捉え方の変化を浮き彫りにすると同時に、そうした作品間に見られる変化の背後に、同時代の精神科学の影響があったことを、まずは明らかにする。

なお、ここでいう精神科学とは、具体的には精神医学・心理学など、精神あるいはその病的状態である狂気・精神病に関わる科学と当時見なされていたもの全般を指す。これらの科学が、同じく人

間の精神を表現するとされる文学に、どのような影響をもたらすのか。芥川文学を一つのケーススタディとして、精神科学が近代日本の文学その他当時の文化全般において、どのような影響を及ぼしていたかを明らかにしてゆく。そして、それにより、文学と科学の横断的研究の一つのあり方を提示することを、その最終的な目的とする。

3. 研究の方法

芥川の前期から後期の作品中、特に狂気など精神科学に関連のありそうな作品を、当時の精神科学の動向と比較検討しながら一つ一つ分析してゆく。そのために、まずは同時代の精神科学の状況を詳細に、その当時の空気に触れるが如く検討してゆくことが中心となる。したがって、そうした当時の精神医学や心理学に関する研究書を参照しつつ、実際に自ら当時の精神医学や心理学・衛生学などの科学系書籍・雑誌のみならず、さらには芥川も目を通す可能性のあった一般雑誌や文芸雑誌、新聞においても、精神科学に関する知見がどのように扱われていたか、網羅的に確認してゆく。

精神科学系...『神経学雑誌』、『心理研究』、『変態心理』、『大日本私立衛生会雑誌』等

一般・文芸系...『中央公論』、『改造』、『太陽』、『新潮』、『新小説』、『読売新聞』、『毎日新聞』、『朝日新聞』等

このようにして同時代の精神科学の動向を確認し、その特徴を明らかにしつつ、それと芥川の前・中・後期それぞれの作品に見られる精神狂気の扱い方と比較し、そこにどのような影響がありえたかを検討する。そして、影響が考えられるとすれば、どのような経路において芥川が同時代の精神科学の動向に触れたか、あわせて実証的に確認してゆく。

4. 研究成果

(1) 2012年度

初年度は「奇怪な再開」と「南京の基督」を中心に、芥川中期の作品を検討した。「奇怪な再会」(『大坂毎日新聞』夕刊、1922年1月5日~2月2日)は、登場人物の中国人女性・孟恵蓮が周りから狂気に陥っている存在と見なされてゆく話だが、その描写に当時の精神科学のロジックが見て取れることを明らかにした。また、この作品が掲載さ

れた『大阪毎日新聞』を中心に、当時の日本の新聞メディアにおける中国の表象のされ方を見てゆくと、中国＝狂気に陥った存在・日本＝それをいろいろと我慢しながらも看護して目を覚まさせる監督者のような存在と位置づけるロジックが見られ、それが中国に対する日本の帝国主義を支えていたことがわかる。こうしたロジックは「奇怪な再会」の最後でも、中国人の孟恵蓮という狂者を、精神病院の医者やその他の日本人たちが、我慢しつつ監護するという構図によって繰り返されており、そこに精神科学から新聞メディアや芥川文学作品への、日本の帝国主義を裏打ちするロジックの提供という事態が見て取れることを浮かび上がらせる。ただし、一方で芥川の同時期の作品「南京の基督」(『中央公論』、1920年7月)と、この「奇怪な再会」を比較すると、両作ともある一人の中国人女性をめぐる、日本人男性が彼女を「妄想」に陥っている存在として位置づけてゆく、という構図の共通性が見られる。そこにはやはり、当時の日本の帝国主義と共通するロジックが見られるわけだが、反面「南京の基督」の方では、必ずしも日本人男性の方が正しいとはいききれない構成になっており、そこに日本の帝国主義やそれを裏打ちする衛生的ロジックが、相対化されうる可能性が残されている。この同時期の両作品の共通性と差異を浮かび上がらせることで、この時期の芥川作品の揺らぎを明らかにした。

これらの分析を、関口安義(編)『生誕120年 芥川龍之介』(2012年12月、翰林書房)に「奇怪な再会 帝国主義批判の可能性と限界」と題して寄稿したり、あるいは近代文学合同研究会例会(2013年3月20日、於慶應義塾大学)で、「奇怪な再会」における狂気と帝国主義 「南京の基督」を補助線として」と題して口頭発表したりして、研究成果として公開した。

(2) 2013年度

2年度目は「二つの手紙」と「地獄変」を中心に、芥川前期の作品にさかのぼって検討した。「地獄変」(『大阪毎日新聞』夕刊、1918年5月1～22日ほか)は、平安王朝期を舞台に、良秀という絵師が時の権力者である大殿との確執を持ちながら、最後には一世一代の作品「地獄変屏風」を完成させてゆく、という内容のものである。いわゆる芸術家小説にあたるものであり、そこに描かれた芸術家像は、まさにロマン主義の影響がうかがえるとともに、当時の精神科学で注目されていた天才観の片影でもあることを明らかにした。また、芸術(家)というものを新聞小説として提示することが、当時の教養として文学や芸術全般を記事に盛り込むことで読者を獲得しようとしていた新聞界の動きを反

映したものであり、そこにやはり精神科学から新聞メディアや芥川文学作品への影響を浮かび上がらせる。一方、この「地獄変」に見られる技法＝語り手の語らない部分にこそ真相を見出すように読者を誘導するような語りの技法も、新聞小説として効果的なものであったと思われる。実は、そうした技法は、これ以前の作品「二つの手紙」(『黒潮』、1917年9月)で、雑誌という舞台ではあるが、既に実験済みのものであった。特に「二つの手紙」では、その語りの技法を効果的にするために手紙が用いられるのだが、この手紙の用い方に、世間一般への浸透を図って通俗的になっていた精神科学雑誌のスキャンダリストティックな手紙の利用形式が影響を及ぼしていると思われることを明らかにした。

これらの分析を、宮坂覚(編)『芥川龍之介と切支丹物 多声・交差・越境』(2014年4月、翰林書房)に「地獄変」 『大阪毎日新聞』での戦略」と題して寄稿したり、あるいは近代文学合同研究会夏季大会(2013年9月16日、於福山文学館)で「地獄変」へのアプローチ」と題して口頭発表したりして、研究成果として公開した。

(3) 2014年度

最終年度は「歯車」(第一章のみ『大調和』1927年6月、のちに『文芸春秋』1929年10月に全章一括掲載)と「河童」(『改造』1927年3月)を中心に、芥川後期の作品を検討した。特に前年度までの検討を踏まえ、芥川作品全体を通してこの2作品を検討した。その結果、正常と異常の境界線を前提に狂気を興味本位的に取り扱っていた前期作品とは異なり、むしろ正常と異常の境界線を曖昧化して、狂気というものを存在論・認識論上の根源的な問題として捉える後期作品への移行という、芥川作品の変化を浮き彫りにした。また、それと同時に、そうした作品間に見られる変化の背景には、同時代の精神科学が、まずは自らの存在意義を確立するために一般大衆を巻き込む必要から、当初は通俗に流れて狂人の行動をスキャンダリストティックに扱っていた面もあったが、その後学問的研究が本格化してゆく中で狂気(異常)と正常の境界線を明示しがたい症例と多く出あい、混沌とし出した という大正前期から後期にかけての精神科学の動向があったことを、実際に芥川が所持していた森田正馬『神経質及神経衰弱症の療法』増補5版(1926年7月、日本精神医学会)を中心に、当時の精神科学の言説を参照しながら、実証的に明らかにした。

これらの分析を、『日本近代文学』第92集(2015年5月)に「芥川龍之介と森田正馬『歯車』と『神経質及神経衰弱症の療法』

を中心に」と題して寄稿したり、あるいは岡山大学言語国語国文学会(2014年7月26日、於岡山大学)で「芥川龍之介の後期作品について その 狂気 の表象をめぐって」と題して口頭発表したりして、研究成果として公開した。なお、庄司達也(編)『芥川龍之介ハンドブック』(2015年4月、鼎書房)における項目執筆にも一部、本研究の成果を反映している部分のあることを、念のためお断りしておく。

以上、このような芥川文学と同時代の精神科学との関わりを一つのケーススタディとして見れば、本研究は精神科学が近代日本の文学を中心に、当時の文化全般においてどのような形で影響を及ぼしていたかを(あるいはより広く文学と科学の同時代における関係性を)今後研究してゆく上での一つの指針なる。それこそが萌芽的研究としての本研究の成果であると考え

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

【雑誌論文】(計 1 件)

西山康一、芥川龍之介と森田正馬 『歯車』と『神経質及神経衰弱症の療法』を中心に、日本近代文学、第92集、2015、pp.123~130

【学会発表】(計 3 件)

西山康一、芥川龍之介の後期作品について その 狂気 の表象をめぐって、岡山大学言語国語国文学会、2014年7月26日、於岡山大学

西山康一、「地獄変」へのアプローチ 新聞小説としての戦略、近代文学合同研究会夏季大会、2013年9月16日、於福山文学館

【図書】(計 3 件)

宮坂覚(編)、西山康一、乾英次郎ほか、翰林書房、芥川龍之介と切支丹物 多声・交差・越境、2014、571(西山担当 pp.27~39)

関口安義(編)、宮坂覚、西山康一ほか、翰林書房、生誕120年 芥川龍之介、2012、320(西山担当 pp.198~205)

6. 研究組織

(1)研究代表者

西山康一(Nishiyama Kouichi)

岡山大学・大学院社会文化科学研究科・准教授

研究者番号：40448212